

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 9 日現在

機関番号：32612

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370135

研究課題名(和文) 気象芸術学の試み：二〇世紀初頭における庭師と天文学者と建築家

研究課題名(英文) An Attempt for the Meteorological Theory of Art: Gardener, Meteorologist, and Architect at the Beginning of the 20th Century.

研究代表者

後藤 文子 (GOTO, FUMIKO)

慶應義塾大学・文学部・准教授

研究者番号：00280529

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の課題である「気象芸術学 Meteorologische Kunstwissenschaft」は、芸術の制作論的諸相において変化する時間＝生命性を本質とした近代芸術・建築を、生成し変化する流体として捉える新たな美術史学・芸術学研究の方法論として構想された。植栽造園家を、本来不動な建築と植物＝有機体とを結合させる存在、つまり無機的存在を有機的生命体へと媒介する重要な「媒介者」と位置づけることで、近代植物学・園芸学と美術史学・芸術学研究の接合・統合を目指した。従来の美術史・建築史的様式論・意味論・機能論が看過してきたモダニズム建築に特有の問題点を明るみに出し、実証的に解明した。

研究成果の概要(英文)：The important essence of modern art and architecture is the vitality which is changing in the various aspects of art poiesis. The main interest of this research planed as a new method for art history and theory of art considers such modern art and architecture as the fluid. A gardener can be considered as most important, unique mediator who binds solid architectures with plants as organic existence. By means of this consideration the unification between the modern botany and horticulture and the history of modern art and theory of art would be aimed. The various problems about modernist architectures which the traditional methods in the art history such as style-, iconological- and functional theory have overlooked were investigated with evidences.

研究分野：西洋美術史

キーワード：気象芸術学 研究方法論 近代芸術 近代建築 近代園芸学 植物 庭園 有機体論

1. 研究開始当初の背景

(1) 気象芸術学の構想：研究方法の水準

本研究の基本関心は、近代芸術と自然の関係性へと向けられている。西洋の伝統では、確固とした不動の大地に樹木が茂り、教会堂や家々の建ち並ぶ景観を「風景（地景 Landschaft）」として捉えてきた。風景画の展開とともに生まれる 18 世紀ピクチャレスク美学が、風景をあたかも自足した二次元的な視覚対象とみなし、距離をとってそれを眺め、享受する美的鑑賞の態度を人々に促した事実は周知の通りである。

それに対して、西洋芸術におけるピクチャレスク美学的自然観を批判する 1970 年代以降の環境美学は、むしろ自然とは、人間が視覚のみならずそのほかの感覚をも発動させて全身でそのなかへ分け入り、さまざまな生きた関係を取り結ぶ、まさに生息環境（ビオトープ）であると主張した。風景は、私＝主体がいままさに自らの足で立つ居場所において、私の五感を通して「そのつど変項である自己知覚」によって生起する事象であり、そうした自己知覚と私の居場所とを同時に感知すればこそ「わたしの意識の現在へと浮上してくることで経験される美的現象」として説明される。だがここでの変化は、あくまでも私という主体を考察の中心に据えることではじめて、「そのつど変項である自己知覚」との関係のうちに捉えられるのであり、芸術作品と結びついた場所の不動性や芸術作品そのものの固体性が、従来通り前提とみなされている事実には変わりはない。

そのため、こうした美学・芸術学の議論を踏まえつつ、本研究は、制作論上の様々な位相において生き生きと変化する時間＝生命性・有機体性を造形の自立的な原理として引き受け、空間・時間問題と多様に向き合う近代の芸術家・建築家の取り組みを検討する研究方法論そのものの水準に、生成し変化する流動性という観点を導入する必要性を自覚

し、研究構想を開始した。そのための一つの重要なモデルが「気象学 Meteorologie」である。人間にとってきわめて身近な足元にある土壌を見据え、大気圏の現象のみならず、大地に生育する植物の植生をも、エネルギーと物質とのダイナミックな連鎖として捉える気象学は、大気圏（大気）・水圏（液体状の水）・雪氷圏（氷）・岩石圏（固体）・生物圏（生物）によって構成される地球システム全体を解明する取り組みにほかならない。気象学モデルは、近代の造形作品を、空間・時間の液体的・気体的な相変化のもとに流動してやまない位相において解釈する試みとして、本研究に多くの示唆をもたらすものと期待された。

(2) モダニズム建築研究の動向：考察対象の水準

一方、本研究が具体的な考察対象とするモダニズム建築をめぐる近年の研究動向において、建築と自然との関係性をめぐる検討に関して以下の点が留意された。

すなわち、20 世紀モダニズム建築、とりわけ個人のための住宅建築に関して、従来の美術史・建築史研究においては、建築が周囲の自然、すなわち庭や植栽から明確に切り離され、完全に孤立した造形物として解釈される傾向が優位し、建設当初には建築との一体化において構想されたはずの作庭や緑化問題が等閑視される傾向が顕著であった。

それに対して、こうした先行研究に異議を唱える近年の研究は、固体的で不動の建築と流動的かつ可変的な自然を互いに不可分な存在ととらえ直し、20 世紀モダニズムの住宅建築における作庭や緑化の重要性を再認識するよう促し、その特性を新たに解明する問題意識を喚起した。イギリスに発祥し、ドイツ国内でも 19 世紀後半から 20 世紀初頭の第一次世界大戦前にかけて広く展開した「改革運動 Reformbewegung」の一環である、いわゆる「改革庭園 Reformgarten」および「改革建築 Reformarchitektur」との関わりを重

視し、自ら植栽するモダニズム建築家を「植栽建築家 Gartenarchitekt」として再考するアプローチは、そうした研究的取り組みが共有する特性であり、モダニズム建築研究に一つの新たな視座を切り拓いたことは疑い得ない。しかしながら、ひとたび研究方法論の水準においては、それらは依然として伝統的な様式論や運用論の立場を主張するものであり、その結果、懐古的で保守的な見解を導きだしていると認めざるを得ない。

上述した「気象芸術学」的試みは、この点を克服するための構想である。

2. 研究の目的

研究背景を踏まえ、本研究は近代芸術史・建築史研究に新たな視座を拓く研究方法論としての気象芸術学 (Meteorologische Kunstwissenschaft) の構築を試み、それによってモダニズム建築に新たな解釈をもたらすことを主たる目的とした。すなわち、本来的に固体としての性格を逃れえないスタティックな存在としての造形作品を、変化する時間の相のもとに、気象学的・流動的な気体・液体として捉えることによって、環境との関わりにおいて作品を考える環境美学的な観点とは異なるアプローチが目指された。具体的には、従来の美術史・建築史研究の基本的な方法である様式論的・意味解釈論的・受容論的な研究手続きにおいては発想されてこなかったファクターとして、「変化する自然の時間」を重視し、それを方法論そのものに導入し、そうした新たな研究方法ゆえに浮き彫りとなるモダニズム建築をめぐる問題を明示して、それに対する新たな解釈を導くことを目的とした。

3. 研究の方法

本研究は、具体的な考察対象としてモダニズム建築家ミース・ファン・デル・ローエ (Mies van der Rohe, 1886-1969) と、彼の処女作《リール邸》(1908-1909) の作庭を手

がけたことで知られる20世紀ドイツの最も重要な多年草栽培家であり、造園家・庭園思想家であったカール・フェルスター (Karl Foerster, 1874-1970) に着目し、近代芸術研究と近代園芸学・植物学研究とを接続・統合することで、本研究目的である「気象芸術学」の構築を試みた。研究期間中に取り組んだ主たる手続きは、ドイツ、米国内の各図書館、関連アーカイブにおける一次資料調査を基本とし、それによって、これまで検討される機会に恵まれなかった資料の発掘・再検討を実証レベルで行い、研究方法論および研究対象の検討、それら双方における新知見の提出を目指した。以下に本研究の具体的な方法を挙げる。

(1) ドイツ人文地誌学の系譜に関する検討

気象芸術学の構築に向けて、ほかでもない気象と不可分に結びつく植物の植生の問題が、カール・フェルスターにおいてきわめて必然的である事実を実証する必要があった。その意味で、彼の出自に深く関わる19世紀ドイツの人文科学・自然科学の伝統が注目された。すなわち、カールの父ヴィルヘルム・フェルスター (Wilhelm Foerster, 1832-1921) の存在である。彼は、近代天文学が近世以来のいわゆる位置天文学から天体物理学的天文学へと転回する19世紀半ばから20世紀初頭に、ほかならぬこの天文学的転回を主導した著名なドイツの天文学者である。1855年に王立ベルリン天文台の第二助手に就任した後、1865年に同天文台長となり、1903年までその職責にあった。とりわけ重要なのは、この間の1855年と1859年に、ヴィルヘルム・フェルスターが19世紀のドイツ地理学者アレクサンダー・フォン・フンボルトと直接交流した事実である。そして、フンボルトに連なる人文地誌的思想への共感と伝統は、ヴィルヘルムを介して息子カール・フェルスターへと紛れもなく受け継がれることとなる。この問題を重視する立場は、カール・フ

エルスターが積極的に関与したモダニズム建築と19世紀的人文学・自然科学の伝統との連続性を見据えた上で前者を再考することを可能にした。なおこの問題の解明には、カール・フェルスター旧蔵書目録調査が有効な手続きであった。

(2) 近代園芸学・植物学資料の検討

従来の近代美術史・建築史研究において、近代園芸学・植物学領域の資料が検討される機会はまったくなかったと言っても過言ではない。しかし実際には、建築と庭園を一体化してデザインした近代的な新たな建築環境空間においては、庭園に植栽される「植物」そのものと建築との不可分な相互関係性が看過し得ない。たとえば、個々の植物に特有な樹葉の色彩学的特徴や生長形態は、近代建築の壁面彩色や形態構成に積極的に関与するのである。不動で固体的な造形としての「建築」と生長的・流動的な有機体としての「植物」、これら相反する性質を備える両者がそのような制作論の水準において互いに連動し合う事態を解明するに当たり、本研究は、近代園芸学・植物学領域の資料を積極的に重視する方法論的立場をとった。具体的には、カール・フェルスターの膨大な量を誇る「著作」、彼自身が撮影した「庭園および植物写真」、「作庭に際する植物配色案図面」、「園芸用カラー・チャート」等を重視し、ドイツ国内において園芸学・植物学を専門とする諸図書館・アーカイヴでの資料調査を実施した。また、園芸学・植物学領域における近年の庭園研究の動向を重視し、重要な研究者と交流・情報交換を行った。

(3) モダニズム建築と庭園の関係に関する検討

従来の美術史・建築史研究においては、庭園は、19世紀末に美術史家によって確立された近代学問としての理解に従って、あくまでも建造物と同様に、美術史学の研究方法に則って考察されるべきものとみなされ、以降、

もっぱらその形式を問う様式論や、運用的な側面を検討する機能論の立場から検討されてきた。そうした研究アプローチを通して等閑視されてきたのが、本来庭園を構成するもっとも重要な要素であり、まさしく生長し変化する存在である植物そのものにほかならない。

本研究は、園芸学、植物学および造園学研究の領域における近年の取り組み、すなわちヴィンマーの研究（『庭園理論史』1989年）に代表される通り、19世紀以来の美術史的庭園研究の方法を批判的に反省し、植物学的・造園学的な見地から植物を主役として庭園史を再構築する研究を重視し、モダニズム庭園が、園芸学・植物学的観点において有していた形態的・色彩的特性を積極的に考慮し、そこから建築を再考する立場をとった。建築の検討に際して植物を考慮することは、いわゆる空間的な横の広がりのみならず、植物にあらわれる時間的成長プロセスを建築デザインの検討に加味することを意味した。

4. 研究成果

本研究は、芸術研究の新たな方法論としての「気象芸術学」構築に向けて、主に大きく二つのベクトルにおいて成果をもたらした。第一に、この方法論を具体化するための研究資料の新たな開拓と評価、第二に、とりわけ20世紀初頭のモダニズム建築を考察対象とする本研究において、「気象学的アプローチ」を芸術の制作論的水準における一モデルとしてのみならず、人文学史・自然科学史的文脈に照らして意義づけたことである。

(1) 研究資料の新たな開拓と評価

研究開始当初には予想されていなかったものの、近代建築と庭園、さらに言えば植物そのものを関連づけて検討するために、「植物写真」、「園芸用カラー・チャート」、「作庭に際する配色案図面」がきわめて重要な研究資料であることを、本研究を通して認識するに至った。

このうち、「園芸用カラー・チャート」に関して、それが近代の造形デザインと色彩論との関わりという点においてもきわめて重要であることは、すでに「近代園芸学とオストヴァルト色彩論」と題する論考として発表した通りである。管見の限り、美術史学研究において、日本・欧米を問わず、このテーマに関する研究はこれまでのところ見当たらないため、まったく新たな問題提起となったと言えるだろう。本テーマに関しては、本年度中にドイツ語による学術論文としても公表の予定である。なお今度さらに、カール・フェルスターと植物の色彩問題という観点でのさらなる検討余地が残されており、研究を発展的に継続する予定である。

また、「植物写真」と「作庭に際する植物配色案図面」に関しては、本研究期間中にまとまった成果として発表することが叶わなかったが、すでに重要な資料群についてのアーカイブ等調査に着手している。前者に関して、従来、植物をモチーフとする写真は芸術表現としての側面が重視されてきたが、あらためて植物の生長形態や色彩を記録する目的で撮影された植物写真とそのイメージ・アーカイブが近代写真史において果たす意義を検討することが求められる。また後者の「作庭に際する植物配色案図面」は、従来のモダニズム建築研究において等閑視されてきた資料ながら、時間（季節）の推移とともに生命的に変化する植物と不動の建築の相互作用を検討する上で、きわめて重要であり、これらの資料を美術史・建築史研究の手続きにおいて積極的に評価することは、いまだ日本・欧米を問わず行われていないことから、きわめて意義深く、本研究の展開として今後、解明に取り組む予定である。

(2) 人文学史・自然科学史的な文脈に照らした「気象学的アプローチ」の意義づけ

これに関して以下の点が評価される。すなわち、ミース・ファン・デル・ローエの処女

作は、その成立という点で、従来の美術史・建築史研究によって、それが19世紀的建築と1920年代以降のモダニズム建築とのちょうど境界に位置するゆえに、とりわけその様式的特徴を根拠に19世紀的建築の延長線上に位置づけられ、モダニズム建築としては過小評価され、以後の建築との断絶が指摘されてきた。しかし、本作において、アレクサンダー・フォン・フンボルトに連なるドイツ自然誌的思想の伝統と、天文学者ヴィルヘルム・フェルスターの近代自然科学思想をとともに自身の根本精神として継承する造園植栽家カール・フェルスターが植物を介してとどめた痕跡は、そうした従来の様式的評価にとどまらない問題をあらためて照らし出したと言わざるを得ない。この一人の造園植栽家は、建築を取り巻く庭園に植栽する植物を通して、不動の建築を有機的・生命的なものへと媒介する媒介者にほかならない。我々にとっては、この媒介者を通して、20世紀初頭の近代建築を、とりわけそれに続く時期に生命論・有機体論への関心を表明するモダニズム建築家の取り組みへと接続させ、気象芸術学が目指す流体的時間性・生命性の相のもとに、モダニズム建築をあらためて再評価することが可能になったのである。

気象芸術学は本研究による独自の提案にほかならない。この提案をもって、今後さらに近代園芸学・植物学研究と近代芸術研究を接続させつつ、考察対象としては、建築にとどまらず、美術・デザイン領域へと視野を拡大し、これまで看過されてきた新たな問題を解明することを目指している。

引用文献

西村清和、「風景の美学」、日常性の環境美学、勁草書房、2012、14。なお、ピクチャレスク美学に対する環境美学の態度についても同書を参照。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

後藤 文子、近代園芸学とオストヴァルト色彩論、美学、美学学会誌、査読有、248号、2016、61-72

後藤 文子、流動する近代デザイン

ヴィルヘルム・オストヴァルトともう一つの「ディー・ブリュッケ(橋)」、慶應義塾大学アート・センター年報、査読無、22号、2015、106-115頁

後藤 文子、造園植栽家フェルスターをめぐる「近さの交信」「遠さの交信」

モダニズム建築と天体観測と気象芸術学、Booklet、慶應義塾大学アート・センター研究紀要、査読無、22号、2014、115-144

後藤 文子、植栽建築家をめぐる「気象芸術学」試論 チャールズ・ダーウィンからミース・ファン・デル・ローエへ、哲学、三田哲学学会誌、査読有、131集、2013、181-203

http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000131-0181

〔学会発表〕(計 1 件)

後藤 文子「エネルギーと近代芸術——ベルリン・ポツダム圏における造園植栽・天文学・エレクトロ文化」、近代芸術学研究会、2014年3月16日、慶應義塾大学三田キャンパス(東京都・港区)

〔図書〕(計 2 件)

後藤 文子 他、共感覚から見えるもの。アートと科学を彩る五感の世界、2016、125～151

後藤 文子 他、色彩からみる近代美術、三元社、2013、293～311

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：

種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

後藤 文子(GOTO, Fumiko)
慶應義塾大学・文学部・准教授
研究者番号：00280529

(2) 研究分担者
なし

(3) 連携研究者
なし